問題　次の文章は、鎌田實（かまたみのる）の著書、『相手の身になる練習』の「序章　生きづらい現代だからこそ必要な力」の中の新型コロナウイルス感染禍（かんせんか）の社会について書かれた一節です。読んで後の問い（問1～問3）に答えなさい（設問の都合で原文を一部省略改変した箇所がある）。

ある女性タレントが濃厚接触者となり、2週間の自宅待機となりました。感染は確定していませんでしたが、その人の住んでいるマンションではエレベーターや玄関などが消毒されたといいます。きっと、そのタレントは他人に迷惑をかけてしまったと肩身の狭い思いをしたことでしょう。

1歩も外へ出ず、2週間の自主隔離（かくり）期間が終わりました。初めて外へ出て、ポストを見ると、小さな花束が入っているのに気づきました。

『おめでとうございます。自宅待機の2週間、何もなくてよかったです』

手紙も添えてありました。

タレントの女性は、感激で涙があふれて止まらなかったといいます。

人間は、こんなに温かなこともできるのです。

①僕は感染者を※バッシングする人が特別悪い人間だとは思いません。常識や思いやりのないひどい人間というわけではないのです。むしろ、僕たちの身近にいる普通の人たちです。その人だって、きっと家族や友人にはやさしい面をもっているでしょう。

では、花束を贈る人と、感染者をバッシングする人とでは、いったい何が違うのか。ただ一つ違いがあるとすれば、「相手の身になることができたかどうか」だと思います。

相手の身になることができれば、感染した人の気持ちに近づくことができます。もし、感染したのが自分だったら、どんな気持ちになるでしょうか。発熱やだるさ、息苦しさなどの体の症状も、不安だろうな。ひとり隔離されて、心細いかもしれないな。あるいは、小さな子どもを育てていたり、体の弱いお年寄りを介護していたりしたら、自分のことより、子どもやお年寄りのことが気がかりかもしれないな……。

ひとくくりに考えていた「感染者」にも、一人ひとり名前があって、それぞれ違う事情を抱えていることがわかったら、簡単に非難することはできません。

人間は、感染者をバッシングする人にもなれるし、花束ややさしい言葉で思いやりを示す人にもなれます。どちらにもなれるとするならば、君はどちらの

人間になりたいですか？

現代は「相手の身になる力」が育ちにくい

幼稚園や小学校で、友だちと仲よく遊んだりするとき、「相手の身になりましょう」と言われたりします。けれど、そのことの大切さをよく考えたり、毎日の生活のなかで実践できているかどうかというと、疑問が残ります。現代の社会は、意識して相手の身になろうとしなければ、相手の身にならなくても済んでしまう仕組みになっているからです。

一つは、競争社会という仕組みです。結果を出すことを問われる成果主義の現代社会では、まず自分が勉強して資格を取得したり、いい大学に入ったり、一生懸命働いてある成果を出すことが求められます。こうした社会を生き抜くには、相手のことなんて考えないほうがいいと言う人もいます。相手のことなんて心配していたら、競争に勝てないばかりか、自分が損してしまうという思い込みも広がっています。

②もう一つは、言葉に偏（かたよ）ったコミュニケーション社会という仕組みです。今の若い人たちは、僕が若いころと比べると話が上手で、話題が豊富、発信力がある人が多いように感じます。すばやく反応して、文章を短くおもしろくまとめたりする力は、ＳＮＳで鍛（きた）えられているのでしょう。気のきいた話で、周囲をクスッと笑わせることができる人は人気者。子どもたちの世界の“※スクールカースト”でも上位に君臨（くんりん）できているのは、そういう人かもしれません。けれど、こうしたウケることを重視したコミュニケーションの陰で、自分の言葉をもつということと、相手の身になるという力は忘れがちになっているように思います。

（中略）

相手が見えないと言葉は狂暴になる

コミュニケーションは、キャッチボールです。ボールを投げて取る、取っては投げる、この繰り返しで相手のことが少しずつわかってきたり、相手と自分の関係性が出来上がっていきます。それには、相手がキャッチできるようにボールを投げなければなりません。つまり、相手の身になって、相手に伝わるように話すことが必要になります。

けれども、ＳＮＳを中心にした現代のコミュニケーションは、キャッチボールではなく、自分がいかにすばらしいボールを投げるかに終始しているように思えます。もともと不特定の相手に発信するＳＮＳでは、誰にボールを投げているのかさえあいまいです。

自分が発した言葉に、誰かが「いいね」を返してくれたら、自分という存在も認められたような気分になります。この気持ちは僕もわかります。自分の言葉をわかってくれる人、賛同（さんどう）してくれる人の存在はとてもうれしい。そして、もっとおもしろいこと、もっと過激なことを書いてやろうというふうにエスカレートしていきます。ある意味楽しい気分になりますが、その言葉を受け取る相手のことまで考えている人はあまり多くないでしょう。

（小学館Youth Books　二〇二一年四月刊）

【※注】

バッシング　ある行為を過剰にあるいは根拠なく非難すること。

スクールカースト　学校における生徒間の人気の度合いを表す序列を、ヒンドゥー教の身分制度（カースト）になぞらえた表現。

問１　傍線部①「僕は感染者をバッシングする人が特別悪い人間だとは思いません。」とあるが、筆者はなぜこのように考えるのか。六〇字以内で説明しなさい。

問２　傍線部②で、筆者は現代において「相手の身になる力」が育ちにくい理由の一つとして、「言葉に偏ったコミュニケーション社会という仕組み」を挙げていますが、筆者はなぜこのように考えるのか。一〇〇字以内で説明しなさい。

問３　あなたは「相手の身になる」ために、どのような「練習」が必要だと考えますか。七〇〇字以内で述べなさい。